

聖書：Ⅱサムエル 14：1～33

説教題：王とアブサロム

日時：2018年9月9日（夕拝）

ダビデは 11 章でバテ・シェバとの姦淫の罪、またその夫ウリヤを殺害する罪を犯しました。彼は預言者ナタンからその罪を指摘され、告白し、主の御前に赦されました。しかしだからと言って、その罪に伴う苦しみは免除されません。色々なことが彼の生活に臨むようになっていきます。前の 13 章では長男アムノンが腹違いの妹タマルを力づくで辱しめる事件が生まれました。そしてそれに怒ったタマルの兄、三男アブサロムが長男アムノンを暗殺しました。皮肉なことはダビデの息子たちはダビデの罪をコピーしているということです。一人は性的な罪、もう一人は殺人の罪。預言者ナタンは 12 章 10～12 節で、同じような災いが今度はあなたの家の中から起こると言いましたが、果たしてその通り、現実にもそのことが起こり始めたのです。ダビデは自分勝手な行動によって他人の家庭を破壊しましたが、今度はそれと同じ息子たちの罪によって自らの家庭が破壊されようとしていたのです。このような罪の刈り取りはまだ終わりになりません。なおその続きが今日の 14 章に記されています。

まずここで行動を取ったのはダビデの軍団長のヨアブです。アムノンを殺した三男アブサロムは今、母方の実家に逃げています。ヨアブはこのアブサロムとダビデ王の関係回復を図ろうとします。なぜでしょうか。それは長子アムノンがなくなった今、三男アブサロムがダビデ王の後継者になるべき人だと考えられたからでしょう。3 章のリストに出て来た次男キルアブは以後、名前が出て来ませんので、早く死んでしまったのかも知れません。従って三男アブサロムを外国の地に追放したままではこの国の将来が危ない。ダビデの身にもし何かが起こったら国は大変な混乱に陥る。そこでヨアブは早くにこの親子関係を修復し、国の体制をしっかりとしたものにしておかなければと考えたのでしょう。そこで一つの作戦を立てます。それはテコアにいる知恵のある女を連れて来てダビデ王に話をさせることです。その彼女とダビデのやりとりが 4～20 節に記されています。

これを見て思い起こすのは 12 章に出て来た預言者ナタンの言葉ではないでしょうか。

一見雰囲気似ています。どちらもたとえをもって語り始め、それはダビデのことだと気付かせるように話をします。そしてダビデはそれによって行動を変えて行きます。しかし大きな違いがあります。それはテコアの女の話は主から出たものではないということです。預言者ナタンは「主が遣わした」と12章1節に書かれていましたが、テコアの女は誰から遣わされたのでしょうか。ヨアブでした。これはヨアブの人間的な知恵によって始められたことだったのです。内容を見てもそのことが分かります。テコアの女が語っていることは、一言で言えば殺人を犯した人にさばきを下さず、それよりもその家の将来を考えて彼を復帰させるように！ということです。ダビデに当てはめれば、殺人を犯したアブサロムを追放したままにせず、国の将来のために彼を迎え入れるように！ということです。果たしてこれが神の御心でしょうか。預言者ナタンはまずダビデの罪を問いました。しかしこの女の言っていることは、罪はそのままで、まずは体制維持を図るということです。それはまさにヨアブの考えです。しかしダビデはそれにまんまと乗せられて王としての誓いをした以上、アブサロムを呼び戻さなければならない状態に追い込まれます。21節でダビデはヨアブに「よろしい。その願いを聞き入れた。行って若者アブサロムを連れ戻しなさい」と指令を出します。こうして神の導きによると言うよりは、人の思惑に操作されてダビデは動くこととなったのです。

さてこうして呼び戻されたアブサロムに目を転じて見て行きたいと思います。彼についてまず25～27節に注目すべきことが書かれています。それは彼が美男子であったことです。足の裏から頭の頂まで非の打ちどころがなかった。どんな人なのか一目見て見たいと少なからずの人が思うでしょう。さらに26節には髪の毛が豊かであったとも記されています。昔もやはり頭の毛が薄いより髪がフサフサの方がモテたのでしょうか。毎年、年の終わりにはそれが重いので刈っていたとあり、その重さまで記されています。その目方がきつとご自慢だったのでしょうか。27節にはその家族のことが記され、娘も美しい女だったとあります。つまり美形の家族でした。ヨアブがこのようなアブサロムを見て早く次の王にと考えて行動したのも分かる気がします。

しかし聖書に親しんでいる人なら逆にこれは不吉なしるしとも見えるものです。このアブサロムのように、かっこいいイケメンで思い起こす人は誰でしょうか。それはイスラエルの初代王サウルです。1サムエル記9章に彼について「美しい若者で、イスラエ

ル人の中で彼より美しい者はなかった。」とか、「彼は民のだれよりも肩から上だけ高かった。」とありました。そのサウルがどんな人生をたどったかを私たちは見ました。そのことを思う時、人の外面は霊的な祝福を保証しないことが分かります。人はうわべを見るが主は心を見る。またここで彼の豊かな髪の毛のことが言われていますが、多くの注解者が指摘するのは、この彼の豊かな髪が仇となって後に彼は命を落とすということです。森の中を驟馬に乗って逃げた時、このご自慢の髪の毛がたくさん生えている頭が木に引っかかって、彼は身を滅ぼすのです。そのことを思う時、何が祝福であるかは分からないな～と思わされます。むしろ大事なことは外見がどうかではなく、その心は神に対してどうかということです。

ではそのアブサロムの人柄はどうであったかが 28 節以降に記されています。そこを見ると、彼は怒りっぽい人だったことが分かります。ヨアブがさっぱり自分を王のところに連れて行ってくれないからと言って、彼は家来たちに命じてヨアブの畑に火をつけさせ、強引に呼び出します。恐い人です。さらに呼びつけたヨアブに話した 32 節の言葉を見ても、彼には自分が犯した罪についての一言の反省も悔い改め也没有せん。32 節の最後に「もし私に咎があるなら、云々」と、まるで自分は少しも悪くないかのよう堂々としています。果たしてこんな彼がダビデの後継者にふさわしい人なののでしょうか。テコアの女はこのアブサロムをただ迎え入れるべきだとダビデに迫りましたが、この彼をそのまま受け入れることが本当に主の御心なののでしょうか。

こういったこの章の中で私たちが一番注目すべきなのは、やはりダビデの姿でしょう。本来彼は殺人を行ったアブサロムを追いかけて行ってでも取り扱うべきでした。王として適切な対処をすべきでした。しかし彼は何もしないまま時間だけが経過しました。そんな中、ヨアブの作戦にはめられてアブサロムを連れ戻すこととなりました。これはある意味でのチャンスです。この時こそアブサロムを正しく取り扱えば良い。ところがダビデは彼に向き合いません。エルサレムまで呼び寄せながら、「私の顔を見ることはならぬ」と面会を拒絶します。これでは何のためにエルサレムに来たのか！とアブサロムが苛立つのも自然です。そうしている内にアブサロムの怒りが爆発し、ヨアブを通して力づくで面会を求めて来ます。さて今度はどうしたか。33 節にその面会の様子が記されていますが、ダビデはここでもアブサロムの罪を問うていません。ただ口づけだけをし

ます。そしてこの口づけも心からのものではありません。久しぶりの親子の再会なのに感動的な要素がない。会話もない。冷たい雰囲気が漂っています。これはダビデの中にアブサロムをそのまま受け入れるわけには行かないという葛藤があったからでしょう。それならそれで罪を問えばいいのに、それもしない。中途半端です。そしてこの王とアブサロムの微妙な関係が次の章で悲劇に発展します。アブサロムはこのようなダビデに不満を持ち、怒り、自らが王座に上ろうとして反乱を起こします。ダビデはそのため大変な逃亡生活を強いられることとなるのです。

私たちはここに何を見るのでしょうか。それはダビデの罪がもたらしている様々な悪影響ではないのでしょうか。彼がアブサロムの罪をきちんと取り扱えなかったのはなぜでしょう。それは先に見たように、自分が犯した罪と関係していたからでしょう。アブサロムが長男アムノンを殺害したのはアムノンが妹タマルを凌辱したからでした。その時点でダビデが正しくアムノンを取り扱っていたならアブサロムはそこまでしなかったかもしれません。しかしダビデは自らも姦淫の罪を犯したからか、あるいは自分の息子へのかわいさゆえか、その問題を2年間も放置しました。その結果、アブサロムはあのような行いに出ました。もちろんそうであったとしてもアブサロムのしたことは大変な罪です。しかしダビデも同じ罪を犯した者です。そのため、息子に毅然とした態度を取ることができない。ここにダビデの罪が以後の彼の生活に心理的に重大な影響を及ぼしていることが分かります。また問題は心理的側面にだけあるではありません。彼の罪は息子たちにコピーされています。その罪は周りに伝染し、広がっています。いわば社会的影響を与えています。そしてダビデの思いを超えて彼の家族に猛威をふるい始め、今や手に負えない大変な状況へ発展しようとしていたのです。

私たちはここから改めて警告を受けます。それは罪とは、このようなどてつもない影響を自分と周りの人々の生活に及ぼすということです。悔い改めればすぐ解決するというような単純なものではない。それは私たちと周りの人々の生活の色々な局面に予想もしない影響を与え、やがて私たちはそれらの刈り取りをしなければならなくなる。私たちはすでに11章で犯したダビデの罪のために、12章、13章、14章と彼に災いが降りかかって来たのを見て来ました。しかしそれで終わりではないのです。この後も15章、16章、17章、18章、19章、20章とすべてダビデの姦淫の罪に端を発する災いの記録が

記されて行きます。主はナタンを通してダビデに、その罪の刈り取りがあることを宣告されましたが、その成就を私たちはまだまだ見て行かなくてはならないのです！これを見て私たちは恐れを抱くべきです。そして自分の歩みに一層注意深くなる者とならなければなりません。

と同時に私たちは希望を失わないようにすべきであると思います。神の正しいさばきはこのように実行されています。先の宣告は少しずつ成就して行きます。しかし同時に私たちが心に覚えているべきは、このようにダビデを導いている神は彼を赦してくださった神であることです。従ってその神はここにも何らかの目的・計画を持ってくださるに違いありません。神はこのような災いの連続によってダビデを終わりにされることはありません。この厳しい懲らしめを経て、厳しい学びの過程を経て、必ず益をもたらしてください。彼を赦し、彼を受け入れ、彼を育てくださっている方として、必ずここからも祝福を取り出してください。ですから私たちも主の前に罪を告白し、赦しをいただいたなら、どんな中でも希望を捨てないようにしたい。なおダビデのような困難な道を通らせられるかもしれませんが、主がすべてを御手に治めて導いておられます。彼を見捨てずになお導いてくださる主のお姿を続く章を読み進めながら見上げて、私たちも主に望みを置き、日々悔い改め、罪の自覚を深くし、主の恵みの道を歩ませていただく者でありたいと思います。